

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 29 年 2 月 7 日発行

第 37 号

発行人 校長 鈴木史良

自分の思いが込められた作文

—— 一人ひとりの心の成長が見えた「作文発表会」 ——

寒さ厳しかった1月が過ぎ去り、2月を迎えてからは、心もち空気がゆるんできたような気がします。降り続いた雨により、グラウンドを覆っていた雪も溶けて、いちめんの芝生が復活しました。立春を過ぎた今、土の中は春のエネルギーが満ちているに違いありません。もうすぐ、もうすぐです。春を知らせる木の芽吹き、葉や草花が勢いよく姿を見せてくれるでしょう。

2月3日（金）の午後、恒例の「作文発表会」を実施いたしました。全校児童生徒が図書室に集い、保護者も見守る中、一人ひとりが自分で書いた作文を読み上げました。スタートは小学部1年生からでした。多くの人が見守る中、とても緊張したと思いますが、正面の台の上に立ち、しっかりと礼をしてから、大きなはっきりとした声で作文を読み始めました。こういう時は心臓がドキドキして声が小さくなったり、早口になったりしやすいのですが、1年生たちは違っていました。大きく、はっきりした発声できていました。そしてそれを聴いているみなさんに届けてくれたのです。きっと何度も何度も練習してこの場を迎えたのでしょう。さすが、本校の1年生だなあと感心しました。

この1年生たちの発表態度を見て、他の学年の子どもたちも大いに影響されたと思います。続いて2年生、中学年……と発表がありましたが、折り目正しく礼をし、大きくはっきりした発声での発表は、たいへんわかりやすく、一生懸命さが伝わって、聴く者の心を捉えました。

子どもたちは自分が発表し、他の児童生徒の作文発表を聴いて終わりではなく、学年の発表が終わるたびに、一人ひとりの作文でよかったところなどを感想として書きました。後で発表した本人も目にすると思いますが、頑張っているところ、よいところを認め合い、それを自信につなげられるのは本校児童生徒のすばらしいところです。

途中休憩をはさんで、高学年、中学生の発表がおこなわれました。学校生活や行事などを題材にしたり、自分の生活の中から題材を選んだりした作文でした。どれも自分なりに課題をとらえ、その課題を解決していこうとする前向きな姿勢にあふれていました。困難や苦勞を乗り越えた強さを感じました。ビデオ参加した帰国受験生やバレエ学校に通う中学生の発表にも心うたれました。



身振り手振りを入れた大熱演



一人ひとりの感想を丁寧に書く

“光ることば”、“うならせる表現”

以上のように「内容面」では、一人ひとり1年間の成長を感じさせるすばらしい作文ばかりでしたが、作文の「表現面」にも注目してみました。子どもたちの作文を読んだり聞いたりすると、その年頃の子もだけしか書けないような表現に出くわすことがあり、そのきらっと輝く表現がさらにその作文を生き生きしたものにするのです。それを私は“光ることば”“うならせる表現”とよんでいます。今回、私が見つけたなかから2つ紹介いたします。

『メダルをもらいました。雪の結晶がきらきら光っているのが見えました。』

今年はスキー教室の終わりに、スキー学校長のご厚意で全員にメダルをいただきました。雪の結晶をかたどった金属製のメダルです。この児童はそのメダルを見て、“きらきら光る雪の結晶が見えた”と表現しました。児童の心も雪の結晶のようにきらきら光っていたのでそう見えたのです。スキー教室をやり遂げた達成感、満足感の感じられるすばらしい表現です。

『低学年にわかりやすく伝えるのも、係長の大切な仕事だとはじめて知った。』

スキー教室の宿舎での生活について、食事係長として活躍してくれた児童の表現です。係長の仕事はたくさんあります。係の仕事内容を十分理解し、係として任された仕事を係全員で果たしていけるようにしなければなりません。当然、指示も必要ですが、それだけでは低学年が動けません。低学年の子どものを思いやる言葉の大切さに気づいたからこそ生まれた表現といえるでしょう。

ピュント小学校との交流を楽しむ

2月6日(月)に、近くにあるウスター市立公園に面した公立ピュント小学校との交流会がありました。秋に訪問したので、今回は日本人学校に招いての交流です。1, 2校時には高学年3人がピュント小5年生23人を迎えました。ホスト役として和太鼓のたたき方を教えたり、グループ対抗によるゲームの進行をしたりと、大忙しでした。さまざまな色を日本語で教え、ゲームに活用する工夫がすばらしかったと思います。

2, 3校時には低学年4人がピュント小1年生19人を迎えました。折り紙で力士をつくり、指でたたくトントン相撲を紹介すると、ピュント校からはスイスの相撲「シュヴィンゲン」を紹介され、体育館での勝負?!を楽しむことができました。ピュント小にはさまざまなナショナルリティをもつ子どもたちが通っています。このような活動を通して、誰とでもコミュニケーションできる力をつけていきましょう。



和太鼓を教える高学年



「すもう文化」を学ぶ低学年